

令和3年度まちぐみ事業業務委託 報告書

報告者 山本 耕一郎

【業務委託概要】

- 1 業務名 令和3年度まちぐみ事業業務委託
- 2 実施場所 まちぐみラボ（所在地：八戸市内丸一丁目3番16号）ほか
- 3 実施期間 令和3年4月1日～令和4年3月31日
- 4 実施内容
 - (1) 市民集団「まちぐみ」とまちぐみラボ運営・管理
市民集団「まちぐみ」の活動の企画・運営及びディレクション業務。
まちぐみ組員募集、まちぐみの運営及び企画の実施検討。活動内容等の広報及びまちぐみ活動の拠点としての「まちぐみラボ」の運営など。
 - (2) 企画実施
八戸の伝統工芸、食文化、産業などの地域資源を活用した企画や中心街の賑わい創出に資する企画を年間4企画実施した。今年度の企画事業は次の通り。詳細は後述参照。
 - ① まちぐみpresentsはっちのパーティーに南部ひしざし体験
 - ② 縄文グッズ制作
 - ③ まちぐみ大学
 - ④ まちぐみ展7／ものづくり体験マーケット

5 実施報告

(1) 市民集団「まちぐみ」とまちぐみラボの運営・管理

場所 八戸市内丸一丁目3番16号 ほか

まちの活性化のための活動に興味を持ち、自由に参加する市民の集団「まちぐみ」加入者と共に、中心商店街や地域との交流を図りながら、新しいコミュニティや中心街の賑わい創出につながるような活動を展開。

市民集団「まちぐみ」の活動に関する企画・運営や組員募集、まちぐみの活動内容等の広報及びまちぐみ加入者や市民が集まり活動する場や中心商店街・地域との交流の拠点としての「まちぐみラボ」の運営。

令和3年度も前年度同様、感染症予防として活動日数は減少したが、組員により **147日間** ラボをオープン、約 **742名(延べ人数)** がラボを訪れた（令和3年3月31日時点）。開室日数およ

び来ラボ数は前年の約2倍となった。

オンラインを使用した交流会に加え、感染が収まっている期間に対面での活動を実施したことにより、組員同士の情報交換・交流の機会となった。

令和3年度は25名が新しく加入し、令和3年3月末で加入者は540名となる。

情報発信としてまちぐみのホームページを作成。活動内容を紹介するため、日常のラボの様子やイベント開催時の様子を定期的にまちぐみブログや組員個々のSNSで発信。

また、組員へはイベント情報等を「まちぐみ通信」としてのメールなどで情報発信。

《まちぐみ組員加入方法》

まちを元気にしたい!まちで楽しいことがしたい!という方々が、まちぐみ組員として加入。ニックネームとまちぐみで活かしたい得意技等の登録で誰でも加入可能。1,000円でまちぐみTシャツ購入、顔写真撮影あり。

【活動報告】

特筆すべきは、公益財団法人 あしたの日本を創る協会主催「あしたのまち・くらしづくり活動賞」において、応募総数271団体の中からトップ3にあたる総務大臣賞に選出されたこと。(10月13日受賞発表/主催のNHKと読売新聞社が受賞を報道した)

主催者の評価内容は、以下の通り。

「なんか楽しそう」を街中に作り出すという明確なコンセプトの下で、地域資源・伝統を活かした独創的な取り組みを継続して行っている点に魅力を感じた。参加する方々も見る側も、共にワクワクするようなまちづくりに取り組み、見事にそれを実現されているようだ。」

公益財団法人あしたの日本を創る協会の自治会町内会情報誌「まちむら」に掲載

そこで暮らす「ひと」がイキイキすることが、その「まち」にとっての最大の魅力だとの思いでやってきたことが、内部よりも外部から評価を得ている。

前小林眞市長にもご報告させていただいた。(10月22日)



他にも、早稲田大学4年生（6月20日）（10月30日）と東北大学大学院の2年生（8月24日）が卒論・修論の研究対象に、また釧路公立大学の1年生（7月18日）が活動の参考にインタビューや八戸に調査に訪れたり、近隣では階上町（11月13日）や八戸市鷗盟大学（11月26日）、遠方では福岡（9月30日）や名古屋（2月23日）からも講演の依頼があったほか、建築雑誌『日経アーキテクチュア』内の連載記事「まちづくり仕組み図鑑」（早稲田大学 佐藤将之教授 他執筆）で、まちぐみの活動が4ページフルカラーで詳しく紹介された（12月23日発行。今後、連載「まちづくり仕組み図鑑」は書籍になる予定）。八戸の小さな動きが他の地域で注目されている。



また、高校時代からまちぐみに参加し、札幌の大学に進学した1年生が参加していたインターン先の西興部村（にしおこっぺむら）とのオンライン交流会を行ない、まちぐみ及びまちぐみラボの成り立ちや仕組みについて色々な質問にお答えした。（9月14日）

以前からお付き合いのある千葉大学の神野先生は、八戸市出身のゼミ生を連れて視察に訪れ、今の八戸の動きを知ってもらう機会となった。（11月19日）



八戸工大菱刺シラボさんが何度も見学やインタビューに来て、「ひしぎし A to Z」という冊子の中でひしぎし部の活動を紹介してくれた。

NPO 法人なんぶねっとが企画している若者育成活動「夢いっぱいプロジェクト」で、小中高生がやりたいことを実現するための協力として壁画を書く場所を探していたため、場所と材料の提供をした（8月21、22日）。



新たな可能性が感じられるものが2つある。

ひとつ目は、ひしぎし部が6年以上続けている「土偶コースター」の制作に、今年度から番町にあるワーカーズコープここロードの方々が参加し始めたこと。1枚仕上げると500円のお礼が出る仕組みで、なかなか安定した仕事ができない中で臨時収入（お小遣い程度だが）があることが彼女たちのやる気創出につながっていると同時に、ひしぎし部員との交流を通して、外部に友達を作りたいという彼女たちの気持ちに少し応えることができている。参加者のひとは「2枚仕上げてまちぐみに入る！」という目標を立て、モチベーションが向上。すでに2枚完成の目標は達成され、コロナ禍で会えていないためまちぐみ加入はまだ実現していないが、2022年3月現在6枚目の制作に取り掛かっている。彼女たちの作品は、カネイリや是川縄文館で実際に販売される予定。自分の作品が商品として並んでいるのを目撃した時の喜びは予想を越えるものとなるのではないか、と想像している。福祉の領域で社会貢献となる活動へと発展させる動きであり、今後はコースター作り以外のことも視野に、関係を構築しさらに連携をするため力を入れていく。活動を作るだけでなく、実際に販売しれくれるお店を5年間獲得していることがここロードの2人だけでなくひしぎし部員にとっても喜ばれている点であり、日常を輝かせる要因になっている。また、コロナ禍で集まれない中でもおうち時間で活動ができる点も意味のある活動になっていると考える。これまでは合掌土偶1種のみだったものを、世界遺産登録を機に土偶柄5種に拡大した。



令和4年3月31日

もうひとつ大きな可能性は、昨年から活発化しているクリエイティ部の活動。今年度は3年前から追加で借りたラボ2階の1室をクリエイティ部の「シェアアトリエ&ギャラリー」にしようと動き出し、リフォームしたり各々の作品を展示したり、少しずつ良い空間になりつつある（2階シェアアトリエ&ギャラリースペースはクリエイティ部員が月2,500円を出資し借用費と活動費を賄っている）。また、はっちで「ものスタわくわくワークショップ」（8月8日）やものスタマーケットイベント（11月20日・21日開催）に「クリエイティ部マーケット」として参加するなど、クリエイティ部単体での活動も行った。来年度は「シェアアトリエ&ギャラリー」の空間を使ってイベントや企画展、ワークショップや、外部イベント等を通して広く市民に開かれた場所にしていく予定。今後、一人ひとりがスピンアウトできるような経験の場をまちぐみとして用意することで、自信に基づくやる気を持って立ち立っていく市民を増やしていきたい。



まちぐみ大学は、今年度11月21日と12月5日の2回実施。クリエイティ部から計7組（8人）が講師として、作品や制作意図などについて講和。当初の期待を大きく越え、それぞれが

それぞれの人生を語る場と化し、予想以上の相互理解や発見が得られた。一人ひとりがオンラインであり尊いものだというを感じさせてくれる意義ありすぎるほどの時間だった。3回目は1月末に予定されていたが、コロナのため延期となっている。第2回高森畳工店の工場見学も開催した(6月24日)。



世界遺産登録決定を受けて、かつて製作した縄文のぼりの内容を更新したり「祝世界遺産」ののぼりを追加制作し、地域のお店や道路工事業者のご協力をいただきながら本八戸駅通りに約30枚ののぼりを飾った。市民や観光客に八戸の縄文についてより知ってもらおう機会を作ると同時に通りを賑やかに演出した。(7月28日)



2015年に購入した「おもしろ自販機」が故障したため、地元業者から中古自販機を購入し、本八戸駅通りを通る方々に楽しんでもらったり驚いてもらったり、SNS等で「八戸の面白い」を発信するきっかけづくりの活動を継続している。10月30日には、たくさんの組員によりペイントも終了。以前にも増して目立つ異様な自販機になり、多くの方の目を止め足を止め、笑い声などが聞こえる場になっている。また、ホテルテトラ本八戸さんが「八戸まちぐみ」面白ジュース付きプランを提供し始めたことも驚きであり喜びでもあった。



「高校生とつくる南部せんべいカフェ(以後略称:セカフェ)」は、「高校生とつくる南部せんべいプロジェクト」に名前を変更し活動を継続。八戸高校、中央高校、早稲田大学、セカフェ卒業生などが参加。卒業生が新たなせんべいスイーツの試作試食会をラボで行うなど(11月6日7日実施)、関係が継続され新旧の交流がある場となっている。コロナ禍で活動自体が難しく、外部には非常



に伝えにくい、形としては見えにくい部分の意味に厚みが増してきている。

お店との連携については、昨年度すだれを制作した福真さんからシャッター画のデザインと制作を依頼され、クリエイティ部を中心とする組員たちがアイデアを出し合っている。

ご近所（本八戸駅通り）の住民で75歳の男性がまちぐみに加入する嬉しい出来事もあった。その日ラボ人だったセカフェ初代リーダー20代と70代のまちぐみならでの交流があった。この男性はやりたいことがあって加入した方で、来年度まちぐみ大学の講師として講座を計画してくれている。地域住民との連携で言えば、内丸在住の切り絵作家さんを講師に迎え、組員・市民対象で切り絵のワークショップも計画している。

その他、SDGsを広める活動をしたいとラボに相談に来た女性が、のちにまちぐみに加入し「サステナ部」を立ち上げ、まちぐみがきっかけで見つけた仲間たちとのオンライン交流会を今年度2回開催した。また、はっちの「未来を創る課題解決コラボプロジェクト企画」に選定されたDrop inのメンバーがラボに相談に来るなど、何かやりたいことがある市民が、ヒントを得たり背中を押してほしいときに気楽に相談に行ける場所としても機能し、パンパンになったり悩んだりしていた頭を整理して帰っていく姿があった。

まちぐみ事業は7年目となるが、今年度初めてラボ人をやった組員が数名おり、運営側としてはとても嬉しい出来事だった。さらに、せんべいカフェに参加し卒業後就職して八戸に残っている組員たちがラボ人をやってくれたり（5月13日）（8月8日）自主企画を実施したり、セカフェが目指していた「いつでも行ける場所づくり」あるいは「いつでも会いに行ける人づくり」が実現されていることを実感できた。東京や県外に出ていった若者とも電話やオンラインイベントで交流する機会が持てていることも含め、関係が継続されていることが大きな成果であり、何よりの財産だと考えている。そしてこれは外に出ていく若者だけの話ではなく、八戸にいる大人の組員にとっても同じ機能を果たしており、居場所があることを実感し、ここにも良いと思える安心感のような言わば“心の居場所”を提供していると言える。

まちぐみの存在意義のひとつは、このような継続的關係づくりであり、外に行ってしまうと地元とのつながりを持ち続けられること。首都圏や八戸での移住イベントも重要だと思うが、地元に残っている大人の役割は、まちぐみのように「種を蒔き続ける」地道な行為なのだと考え継続実施している。それがもしかするとUターンの可能性になりうるのかもしれない。

また、まちぐみに対する思いが熱く記されているまちぐみブログが多いと感じたのも今年度の特徴で、積年の思いや自分にとってのまちぐみとは何か綴られているものもあった。コロナ



禍に少なからずつながりや対面の温もりを無意識に欲していたのかもしれないし、そのような市民の受け皿になりたいと考えている。まちぐみ展の報告書でも少し触れているが、まちぐみブログが年間100以上の発信を積み重ねていることが、研究の際の情報収集にとっても役に立っていると評価されている。

コロナ禍でも組員発案のイベント(クリスマスマーケット、スイーツ試食会など)(12月25日)が実施されたり、まちぐみラボ2階のリフォームを一度に多くが集まらなくてもできる形で実施するなど、知恵と工夫で難しい時期を乗り切りながら、ひしぎし部、クリエイティ部、まちぐみ大学、南部せんべいプロジェクト、組員企画を通して、新加入した組員が古い組員と多世代交流する場が創出できている。

来年度もどのような状況になるかわからないが、八戸工業大学の菱刺しラボさんやワーカーズコープココロードさんなど外部と連携した活動や、まちぐみ大学やクリエイティ部ギャラリーを市民に開くなど外部とのつながりを広げる活動を、無理のない形で実行する市民集団まちぐみを維持していく。

(2) 企画実施

①毎月第3日曜日「まちぐみpresentsはっちのパーティーに南部ひしぎし体験」

場 所：はっち館内、マチニワ

実施日：令和3年5月16日、6月20日(マチニワ開催)、7月18日、8月15日、
10月17日、11月21日、12月19日

※令和4年1月～3月は臨時休館のため中止

「はっちのイスに南部ひしぎし」から派生した“はっちのパーティーに南部ひしぎし”。コロナ禍で難しいと思われたが、結果として7回実施することができた。まちぐみ展7期間中の2日間を含めると計9回の予定だった。2020年12月に作業を開始したパーティーは、1年後の2021年12月に完成。100人以上の市民や県外からの方が参加した。

高校1年生の男子が家族と一緒に初めて参加したあと、次の回にもまた家族と来てくれるなど、新しい参加者は増えていると同時に、前にも参加経験のある親子が久しぶりに参加してくれるなどリピーターも増えている。

第3日曜日に固定することで、はっち恒例のイベントとして認知している方もいるようだが、中には活動日ではない平日に来て作業していくリピーターもいる。

中心人物として活動を引っ張ってくれている組員は、平日の空き時間に来て仕上げ作業をしてくれたり、刺し進めてくれるなど、自分の得意なことで活躍してくれる市民の力によって世界に一つだけの素晴らしい作品を作ることに成功していて、外部からの評価も高い。

また、八戸工大の川守田先生率いる菱刺しラボの学生がまちぐみラボに見学及びインタビューに来たり、ココロードの方たちとのコースター制作など、横のつながりも発展中だ。

八戸工大ひしぎしラボが制作した『菱刺しAtoZ』という冊子では、その時のインタビューをもとにした記事が紹介されている。

1月に開催された「はちのへ手しごと展」では、はっちひろばにイス約100脚が綺麗に並べられ、

来館者からも大好評だったようだ。

今までにおそらく1000人以上の方が参加され、その一人ひとりの力が積み重なって作品が出来上がっていくプロジェクトデザインにより、自分のイスあるいはパーテーションがある場所としてはちを“自分ごと”に変える効果がある。また市民や観光客に開かれたプロジェクトは、はちがより愛される場所になることに少なからず貢献できていると考える。



②縄文グッズ制作

場 所：はっち館内、まちぐみラボ（八戸市内丸一丁目3番16号）ほか

実施日：不定期

史跡是川石器時代遺跡を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録されたことをもっと発信しよう！と「祝！世界遺産」の新規のぼりを8枚制作。さらに既存の”縄文のぼり”の内容を一部アップデート。合わせて約25枚ののぼりを本八戸駅通り沿いの店舗などのご協力をいただきながら飾り、八戸の玄関口であるこの通りを賑やかに演出した。（7月～12月）第3回縄文フェスが予定されていたが、コロナの影響でいまだに延期になっている中、市民や観光客に世界遺産登録のことや縄文の情報を知ってもらうことに少なからず貢献できたと考えている。

また、2015年から継続している“いのるんコースター”づくりは、新たに4種のデザインを追加。縄文を代表する土偶5種となり名前も“土偶コースター”と改名し、引き続きカネイリや是川縄文館などで取り扱われている。



自宅に居ながらも組員が活動に参加できるこの手法は、コロナ禍でも存分に機能したと同時に

に、会えない中でも「繋がれている」ことを実感できる新しいコミュニティのあり方を示したと言えるかもしれない。

さらに、一般市民が作った作品が実際に店頭で並んでいる状況を用意できていることは、市民にとっての喜びやモチベーションに繋がり、目に見えにくい大きな成果をあげ続けていると考えている。

③まちぐみ大学

場 所：はっち館内、まちぐみラボ（八戸市内丸一丁目3番16号）ほか

実施日：令和3年11月21日、12月5日

昨年度、まちぐみ組員のきむが立ち上げたまちぐみ大学は、今年度、まちぐみ屈指のクリエイターたちが、自分の活動や作品についてプレゼンテーションする講義を2度開催した。

11月は、いっしー、しばやまいぬ、ひろし、

12月は、ゆかりん、みさ、ももりん、もりん、へんじんちゃんがプレゼンテーション。

1月末に予定されていた3回目は、コロナの影響で延期となった。



各々の活動や作品を語ることを想定していたものだが、期せずして講師それぞれの人生を語る場となり、受講者は講師をより深く、講師は自分自身をあらためて理解する機会となった。

一般市民にとって、新聞や雑誌にインタビューされ取り上げられたり、誰かに自分のことを話す機会は決して多くはない。ゆえに、雑誌や新聞に載ると自慢したくなるのが一般的だと思うが、そんな機会はやはり多くは持てない。

まちぐみ大学では、希望すれば誰でも自分のことを話す機会を持つことができ、受講者に自分を理解してもらっていると実感することを通して自己肯定感を持つことができる。

まちは「ひと」でできている。

「ひと」がイキイキしていられることが、まちの活性化には一番の近道である。その部分をやらせていただいているのがまちぐみであり、まちぐみ大学も同様に、「今日もいい日だったなあ」と気持ちよく家に帰れる心の状態を作る実践をしている。

昨年度の動画はまちぐみ展6で上映したあと、はっち4階のまちぐみブースで1年間上映した。今年度の動画もまちぐみ展7で上映し一般市民にも公開。今後は、昨年度の動画も含め、まちぐみ大学ホームページでの公開を検討していく。

④まちぐみ展8／ものづくり体験マーケット

場 所：はっち館内、まちぐみラボ（八戸市内丸一丁目3番16号）ほか

実施日：令和4年3月10日（木）～21日（月・祝） 9：00～21：00

はっちの臨時休館延長により、組員限定の予約制公開として実施

7回目となる「まちぐみ展7」では、まちぐみブログや組員のSNSなど、地道に発信してくれている記事の一部を、読者の反応やコメントと合わせて見せる形で展示した。

ブログは年間100以上の発信があり継続されていて、昨年日本建築学会で発表された早稲田大学大学院による論文の研究時にとても役立ったとのお声をいただくなど、まさに継続は力なり。非常に意味があり、無理なく続けられる手法として成功している。

組員は自分の得意なことで活躍しているため、自分の実績を発信したくなる。発信できる喜びと機会を提供しているのがまちぐみであり、彼らの日常を豊かなものにしていくようだ。

月毎に並べて展示したことにより、活動量が感染状況に直に影響していることが目に見えて実感できる展示となったが、一般公開は叶わず、まちぐみ組員のみ予約制で鑑賞する形での開催となった。セカフェ卒（八戸高校出身）の大学生が帰省中に鑑賞に来て久しぶりの再会もあるなど、10名の組員が予約鑑賞を楽しんだ。

会期中の土日には、まちぐみクリエイティ部有志による「ものづくり体験マーケット」を開催する予定で、6人の組員が準備を進めていた中、直前で開催中止となりとても残念だった。

予定していた内容は、まちぐみクリエイティ部6人が1人にひとつ特設屋台を出展し、市民の皆様にもものづくり体験をしていただくことだった。そのような経験を積み重ねて、ここからスピンアウトし独り立ちしていくきっかけにできればという思いから企画した。

来館者にもものづくり体験を提供することは、単に作品展示だけをするよりも来館者との交流が生まれやすいことから取り組んだものだが、交流のきっかけ作りという意味に加えて、それぞれのクリエイターがお客様とふれあう経験を積む場であり、少しかもしれないが収入を生むテクニックを習得する場でもある。

今は埋もれている若手クリエイターたちが、いつまでも好きなことを続けられるように、彼らの才能を生かせる場をつくり、経済的に支える仕組みをつくる実践である。

その先に、まちぐみクリエイティ部として、あるいは個人作家として、外部組織のイベントなどに呼ばれるような存在に育っていくことを目指して活動をしている。

今後、はちのへほコテンやはっちのものづくり系イベントでのイベントに出展する予定。

以上

